

漢訳『生経』の語法について

（その一）

伊 藤 丈

ここでは、「相」字が人称代詞としての作用を担っていると思われる用法について、竺法護（二三三—三二〇）訳の『生経』と千宝（？—三一八？）著の『搜神記』を対象に、少しく考察を加えたい。この両者は説話としての共通性を有し、かつ、時代のおよび地理的にも極めて近接していることがうかがわれる。即ち、竺法護が今の陝西省にあつて漢訳活動をつづけ、千宝は今の河南省に生存したとされ、文化の中心も長安・洛陽にあつたと思われるところから、漢語語法上においておそくは同様の用法が見出されるのではないかと考えるのである。

以下、その実際についてみてゆこうと思う。

① 応時燕飲、作諸伎楽、共相娛樂、各各相問本末和解意（生卷三 88頁上、正藏卷三）

② 頻夢虎噬其足、（衡）農呼妻相出於庭、叩頭三下（搜卷一一 138頁、中華書局）

③ 即処女用与年少梵志、其年老者、心懷毒惡、卿相毀辱而奪我婦（生卷一 75頁中）

④ 其人曰諾、……王曰、觀仁言行舉動進止、果能辨之、故相召耳（生卷四 97頁中下）

①と②においては、「相」字は「タガイニ・トモニ」という意味であるが、③と④については、そのように解することは困難であることが分る。

即ち、③と④の「相」字は、

③ 年少梵志——（我）——相

④ 其人——（仁）——相

と線で結ぶことが可能であろう。

従つて、③と④にみられる「相」字には、③では第一人称を、④では第二人称を、おのおの表わしていると思われる。

では、『搜神記』に例を求めてみると、

⑤ 良久、吏曰、感卿遠相載、此書不可除卿名（搜卷五 65頁）

⑥ 崔（少府）謂（盧）充曰、君可婦矣、女有娠相、若生男、当以

相還（搜卷一 六 204頁）

⑦（盧）充上車、去如電逝、須臾至家、家人相見悲喜（搜卷一 六

204頁）

が得られ、次のような関係を成立させていることが了解されよう。

⑤ 吏——（吾）——相

⑥ 盧充——（君）——相

⑦ 盧充——（彼）——相

かくのごとく、『搜神記』においても三例の「相」字が、第一人称から第三人称のはたらきを有しているものとみられる。

この「相」字が人称代詞の機能を持つていると思われる例は、やのちの南朝宋（四二〇—四七九）の劉義慶（四〇三—四四四）が著したとされる『世說新語』においても見出すことができる。

⑧ 巨伯曰、友人疾、不忍委之、寧以我身代友人命、（胡）賊相

謂曰、我輩無義之人、而入有義之國、遂班軍而還（世卷一德行3頁、中華書局）

⑨友人語巨伯曰、吾今死矣、子可去、巨伯曰、遠來相視、子令吾去（世卷一德行3頁）

⑩有一人欲依附、……既以納其自託、寧可以急相棄耶（世卷一德行3頁、4頁）

⑧荀巨伯——（吾）——相

⑨友人——（子）——相

⑩一人——（其）——相

それでは、「相」字に人称代詞としての機能があるとするならば、否定文中において、特に上古漢語にあつては、しばしば代詞（たとえば「吾」「之」が動詞に先行する、ということと関連があるのであろうか。

なんとなれば、

⑪子曰、以吾一日長乎爾、毋吾以也、居則曰、否吾知也（論先進篇）

⑫七十者衣帛食肉、黎民不飢不寒、然而不王者、未之有也（孟梁惠王章句上）

は、代詞が動詞に先行している上古漢語の例であるが、次の、

⑬其父拊而祝之曰、若爾有命、當復更生、豈非骨肉所願、今但欲還家、不爾葬也、（搜卷一五184頁、185頁）

⑭有一異兒、長四尺余、年可六七歲、衣青衣、忽來從羣兒戲、諸兒莫之識也（搜卷八113頁）

は、⑪と⑫のように代詞が動詞の前に位置し、上古漢語の構造と相似している。

漢訳『生経』の語法について（その一）（伊 藤）

しかし、次の例の、

⑮木与果分別、美辞伴喜笑、吾終不信卿、（生卷一74頁下、偈文）

⑯（張）華曰、此二物不值我、千年不可復得（搜卷一八220頁）

は、人称代詞が動詞の賓語となつており、上古漢語の代詞が、動詞にしばしば先行するということがここではくずれ、人称代詞の「卿」と「我」が、一般の賓語と同様に扱われていることが指摘される。即ち、否定文中の代詞の用法は、『生経』と『搜神記』において異なる限り、

④否定詞＋代詞＋動詞

⑤否定詞＋動詞＋代詞

の二つの形式をもつて行われていたものと思われる。

では、「相」字の場合はどうであつたらうか、

⑰与卿作怨、或当危害、或加毀辱、終不相置（生卷一75頁中）

⑱謂（文）顯曰、我以窮苦告君、奈何不相慰悼乎（搜卷一六193頁）

この二例から「相」字には、

⑰卿——相

⑱我——相

の作用をそなえながら、動詞に結合していることが知られる。

さて、これまで述べたことから、「相」字についてほぼ次のことが言えそうである。

○人称代詞の作用を有する。

○肯定文・否定文いずれにおいても、動詞の前部に結合する。

注等全て省略

（大正大学大学院）